

『妻たちと娘たち』の魅力

中村みどり

はじめに

『妻たちと娘たち』は、1864年8月から1866年1月まで、1年半にわたって『コーンヒル・マガジン』に連載された小説である。完結を目前にしてギヤスケルが急死したため、編集者のフレドリック・グリーンウッドがギヤスケルの娘たちからギヤスケルの構想を聞いて結末の要約を付け加え、連載が終了した。しかし、連載はあと1回を残すのみであり、結末は要約がなくとも誰の目にも明らかであるので、未完ではあるが、一般に完結した小説と同様に扱われている。そしてこの小説は、A. W. ウォードやデイヴィッド・セシルによって、ギヤスケルの最高傑作と評されており⁽¹⁾、ギヤスケルの作家活動の集大成といえる作品である。ユーモア、アイロニー、巧みに構成されたプロット、見事な人物描写といった多くの魅力をもっているが、本論では、主人公モリーの成長を中心に、『妻たちと娘たち』の魅力を考察したい。

1

まず初めに、この物語の軸を成すモリーの成長をモリーとギブソン氏との父子関係から考察したい。これまでモリーの父ギブソン氏は、社会規範にとらわれた古い世代の代表としてしか評価されていないが、父と娘との関係に着目すると、ギブソン氏はモリーの成長を映す鏡であるとともに、ギブソン氏自身の父親としての気持ちも巧みに表現されていることがわかる。

物語の始めではモリーは12才の少女である。3才のときに母をなくしているが、乳母と家庭教師がモリーの世話を巡って張り合うほど母親代わりの女性たち

に可愛がられて育てられてきた。父親からも愛情を注がれ、モリーとギブソン氏は愛情と信頼の絆で堅く結ばれている。その様子はこう書かれている。

... Molly took her little griefs and pleasures and poured them into her papa's ears sooner even than into Betty's, that kind-hearted termagant. The child grew to understand her father well, and the two had the most delightful intercourse together — half banter, half seriousness, but altogether confidential friendship. ⁽²⁾

ギブソン氏は感情を表に出すことはしないが、モリーが園遊会に行きたい素振りを見せれば娘を喜ばせたい一心で手筈を整え、娘が園遊会から帰っていないと知ると、仕事から帰った足で、夕食もとらずにモリーを捜し、伯爵の屋敷へモリーを迎えに行く。ギブソン氏にとって娘の喜びは自分の喜びであり、娘の苦痛は自分の苦痛なのである。

モリーにとっても父親はなくてはならない存在である。モリーは園遊会に行っ一人取り残され、迎えにきた父親と再会すると、安堵の余り父親に抱きついてわっと泣き出してしまう。屋敷からの帰り道でモリーは父親にこう言う。

Papa, I should like to get a chain like Ponto's, just as long as your longest round, and then I could fasten us two to each end of it, and when I wanted you I could pull, and if you didn't want to come, you could pull back again; but I should know you knew I wanted you, and we could never lose each other. (p.40)

モリーとギブソン氏は不可分な一体を成しているのである。

モリーが16才になると、ギブソン氏の弟子のコックスがモリーへの恋文を女中に託し、それをモリーの目の前でギブソン氏が取り上げるという事件が起こる。ギブソン氏はほんの赤ん坊だとしか思っていなかったモリーが恋愛の対象となる娘に成長していたことに驚き、当惑し、娘を誘惑から守ろうと頭を悩ませることになる。ギブソン氏にとって若い男たちは皆、かわいいひとり娘を追いかけてく

る狼たちに思えてくるのである。そこで、ギブソン氏はモリーをコックスから遠ざけるために、断腸の思いでモリーをハムレー・ホールへ送り出す。この時、ギブソン氏は手紙の内容も差出人も、モリーをホールへ泊まりにいかせる本当の理由も、モリーには伝えない。さらに、モリーをコックスから守るためには母親という監督が必要だと考えて、モリーに相談せずに再婚を決めてしまう。ギブソン氏はモリーを独立した人格としては認めていないのである。

しかし、父親の突然の再婚は、モリーにとっては衝撃であり、モリーはまるで父親に棄てられたかのように悲しむ。再婚の知らせを聞いた時の気持ちは、こう記されている。

It was as if the piece of solid ground on which she stood had broken from the shore, and she was drifting out to the infinite sea alone. (p. 118)

そして、木の根につまづいたモリーをロジャーが支えたように、モリーは “One has always to try to think more of others than of oneself” (p.124) というロジャーの助言を支えに、自我を抑えて父親の再婚を受け入れようと葛藤する。モリーは愛他主義を受け入れながらも、自己否定という死を拒否してこう言う。

It will be very dull when I shall have killed myself, as it were, and live only in trying to do, and to be, as other people like. (p.140)

そしてこの葛藤の中で、自分を父親とは別個の、独自の意思をもった存在としてとらえるようになる。

このモリーの変化は、継母を迎えるために家が改装され、母の死の情景が浮かぶ部屋が姿を変えることと、継母が更に模様替えをして、モリーの母の形見の家具をすべて片付けてしまうことに象徴されている。モリーの子供時代は終わったのである。

この後間もなく、モリーはハムレー・ホールで地主ハムレーの長男オズボーンの秘密の結婚を偶然知り、父には言えない秘密を持つようになる。そして密かに

ロジャーへの思慕を募らせてゆく。シンシアがロジャーのほかにもプレストンとも秘密の婚約をしていると知ったときには、モリーは秘密を守って独力で事態を解決しようと、プレストンと一人きりで対決する。そしてプレストンとの密会が町の噂になると、ギブソン氏は娘から真実を聞き出して娘の汚名を晴らそうとするが、モリーはプレストンと会ったことは認めても、誰のために会ったのかは決して明かさない。そして、プレストンから直接真実を聞き出さないように、時間が経って噂が消えるのを待つようにと父を説得し、自分の信念をこう主張して、自分の決断の責任を自分で取る覚悟を伝えるのである。

Perhaps I've been foolish; but what I did, I did of my own self. It was not suggested to me. And I'm sure it was not wrong in morals, whatever it might be in judgment. ... If people choose to talk about me, I must submit; ... (p.497)

ギブソン氏はモリーの意思を認め、モリーの決断を見守ることにする。

しかし、ギブソン氏がモリーの巢立ちを実感するのは、モリーの恋に気付いてからである。ギブソン氏は、二度目の航海を目前にしたロジャーがモリーを愛していることに気付くと、コックスの恋文を見つけたときに劣らず動揺し、さよならのメッセージをモリーに伝えてくれますかと頼まれると即座に断る。そしてモリーへの愛を告白されると、ロジャーの気持ちを認め、殆ど自分の意思に反してロジャーと握手するものの、それでもなおモリー個人への伝言は断る。ギブソン氏がこのように娘の結婚に消極的な原因は、ギブソン氏が女心の複雑さに懲りて、それ以後あらゆる恋愛ざたからいっさい手を引いたと 36 章に記されているが、ギブソン氏がロジャーに言う "I suppose losing one's daughter is a necessary evil." (p.613) という言葉に父親の本音が表れている。ギブソン氏はシンシアとロジャーが秘密の婚約をしたとき、モリーにオズボーンとの仲を尋ね、"I don't want to have my Molly carried off by any young man just yet; I should miss her sadly." (p.386) と心から語っているが、この時と変わらぬ気持ちがギブソン氏の言動には見え隠れしている。

ギブソン氏は、ロジャーが来ないと知って食欲をなくしたモリーを見て、初め

て娘の恋を知り、娘の巣立ちを実感する。その様子はこう記されている。

“*Lover versus father!*” thought he, half sadly. “*Lover wins.*” And he, too, became indifferent to all that remained of his dinner. (p.614)

このように父と娘の関係を見てみると、『妻たちと娘たち』には、父と娘との信頼関係だけでなく、モリーの成長につれて父と娘との関係が成熟してゆく様子が描かれ、娘の成長を見守る父親の心情が巧みに描かれていることがわかる。

ウィニフリッド・ゲーリンはモリーについて、モリーをそれまでのヒロインと異ならせているものはモリーの階級ではなく、モリーの成長が徐々であり自然であることであると述べており⁽³⁾、ギブソン氏にはギヤスケルの夫と父親とに似たところがあると指摘している。⁽⁴⁾

ギヤスケルは、妻として夫に寄り添い自ら娘たちを育てた経験と、自分自身の娘時代の記憶とを生かして、少女の成長を多角的に描くという新境地を開いたといえるであろう。

2

モリーの成長は地主ハムレーとの関係の変化によっても描かれている。次にモリーの成長を地主ハムレーとの関係から見てみたい。

モリーが初めてハムレー・ホールにやってきたとき、地主ハムレーは医者の娘に過ぎないモリーが息子たちと恋仲になることは断じて許せないと考えているが、若い女の子が家にいることは目新しく、利発なモリーがすぐに気に入る。地主ハムレーに庭を案内してもらおうモリーの様子が“*Molly followed him like a little dog*” (p.81) とあるのは、この頃の二人の関係を表している。

モリーはハムレー・ホールに滞在する以前に、すでに読み・書き・計算のほか、フランス語、絵画、ダンスを習わせてもらっており、多くの本を読んでいたが、ハムレー・ホールで地主の娘がする仕事をし、ハムレー夫人の話し相手になり、ピアノの練習をし、名作を読みふける。そして、愛他主義を知り、自然科学に興味を持つようになる。モリーはハムレー・ホールで暮らすうちに洗練され、

すっかりハムレー家の一員となるのである。ギブソン氏の結婚式の前にモリーがハムレー・ホールを去ると、地主ハムレーはモリーがいないことを寂しく思う。

病気のハムレー夫人に付き沿うためにモリーが再びハムレー・ホールを訪れたとき、ハムレー家の長男オズボーンが大きな借金を作ったことが判明し、ハムレー夫人の病状が悪化する。モリーは苦境に立ったハムレー夫妻の気持ちを汲み取り、夫妻のために献身的に働き、地主ハムレーにとって宝物となる。モリーがハムレー・ホールを去るときには、地主ハムレーは娘に対してするようにモリーを両腕で抱きしめてキスをする。モリーの同情心と献身的な奉仕が認められ、モリーは小犬のような存在から、役に立つ娘へと変わったのである。

しかし、地主ハムレーはモリーを後取り息子の花嫁候補としては考えられない。ロジャーとシンシアが婚約したとき、ギブソン氏がシンシアの人柄を百人に一人の娘と評すると、地主ハムレーはこう答える。

Your Molly is one in a thousand, to my mind. But then, you see, she comes of no family at all — and I don't suppose she'll have a chance of much money. (p.379)

地主ハムレーはモリーの人柄を高く評価しつつも、家柄と持参金がないので息子の妻としては迎えられないと考えているのである。

モリーと地主ハムレーとの関係は、オズボーンの死後逆転する。オズボーンの亡骸を前に茫然と座りこむ地主ハムレーの口にモリーがスープをひとさじ流し込み、地主ハムレーがそれを本能的に飲み込む様子は、“as if he had been a sick child, and she the nurse” (p.529) と描かれており、その後の二人の関係を象徴している。モリーはオズボーンがエイメイというフランス人のカトリック教徒で子守をしていた女性と密かに結婚し、子供をもうけていたことを地主ハムレーに知らせ、情緒の不安定な地主ハムレーに付き沿い、心の支えとなる。一方、オズボーンの危篤の知らせを受けて駆けつけたエイメイが倒れ、モリーはエイメイの看護について、ギブソン氏からの細かな指示を看護婦たちに伝え、亡きハムレー夫人に代わってハムレー家を支える。モリーが過労で倒れ、ハムレー・ホールを去るときに、地主ハムレーはついにモリーの真価に気付くのである。

モリーが健康を取り戻し、ハムレー・ホールを訪れたときには、地主ハムレーはモリーにこう漏らす。

I wish it had been you, Molly, my lads had taken a fancy for. I told Roger so t'other day, and I said that for all you were beneath what I ever thought to see them marry — well — it's of no use — it's too late, now, as he said. (p.603)

これは、モリーの“steady every-day goodness” (p.219) が地主ハムレーの心に沁み入って地主の頑固な偏見を溶かし、階級や持参金に勝る価値として認められたことを示している。ギャスケルはモリーと地主ハムレーとの関係の変化によって、モリーの成長を描くとともに、モリーの善良さを階級や財産に勝る本質的価値として示しているのである。

3

次に、モリーとギブソン夫人、シンシアとのコントラストが、モリーの善良さを具体化し、モリーの新しさを示していることを検証したい。

まず、ギブソン夫人の価値基準が金銭であるところがモリーと対照的である。ギブソン夫人は、新婚旅行から戻った途端に夫が急いで往診に出掛けるとモリーにこうこぼす。

But if this Mr. Smith is dying, as you say, what's the use of your father's going off to him in such a hurry? Does he expect any legacy, or anything of that kind? (p.175)

そして、地主の長男オズボーンにシンシアを近付けようと、次男ロジャーを冷たくあしらうが、オズボーンの余命が短いことを知ると、ロジャーへの態度を一変させる。

また、ギブソン夫人は階級で人を判断するスノップであり、貴族にへつらい、

自分より下の階級の人を見下す。ギブソン夫人は舞踏会でモリーが商人たちと踊るとモリーを叱り、よその家を訪問する時間についても、相手によって道徳律を変えるのである。

ギブソン夫人が自己中心的で同情心がない点も、モリーと対照的である。たとえばギブソン夫人は、ハムレー夫人が危篤になってモリーが悲しみに沈んでいるときに、モリーを無理にダンスパーティーに付き合わせようとしてこう言う。

Nonsense! You're no relation, so you need not feel it so much, ... We might sit twirling our thumbs, and repeating hymns all our lives long, if we were to do nothing else when people were dying. (p.199)

このように、金銭と階級にとらわれ、自己中心的なギブソン夫人の存在は、社会通念にとらわれずに物事の本質を見ぬき、愛他主義を実践するモリーの善良さを引き立てているのである。また、体制にくみして生きるギブソン夫人は、社会通念にとらわれないモリーの新しさを際立たせている。

モリーとシンシアとのコントラストも明らかである。

まず、この二人のコントラストはその名前に表れている。ギブソン氏が言うように、モリーという名前は“plain” (p.127) であり、シンシアという名前は“such an out-of-the-way-name, only fit for poetry, not for daily use” (p.112) である。

外見も対照的である。モリーは黒髪で灰色の内気そうな目をしており、服装に無頓着であるが、シンシアは赤毛で青い目をしており表情豊かで、背が高く優美な姿で、ファッションのセンスが抜群である。

また、シンシアがオズボーンに“Molly, you see, devotes herself to the useful, and I to the ornamental” (p.318) と言っているように、モリーは人の役に立つことに自分の存在意義を見だし、シンシアは人に賞賛されることで自分の存在意義を確認する。

そして、シンシア自身が“I'm capable of a great jerk, an effort, and then a relaxation — but steady, every-day goodness is beyond me. I must be a moral kangaroo!” (p.219) と言っているように、シンシアの善行は衝動的なも

ので、モリーの“steady, every-day goodness” (p.219) とは異質のものである。シンシアは自分のボンネットから造花を外してモリーのドレスにつけたりするが、このような行為は非日常的で装飾的なものである。モリーがハムレー・ホールから疲れて帰宅すると、シンシアは自分も一緒に行って手伝うと申し出るが、衝動的な申し出が断られると半ば嬉しく思うのである。

また、モリーとシンシアの愛情も対照的である。シンシアはモリーがハムレー夫人の死を悲しんでいると、モリーにこう言う。

I wish I could love people as you do, Molly! ... A good number of people love me, I believe, or at least they think they do; but I never seem to care much for any one. (p.218)

シンシアは恋愛においても、プレストンが親切で嫌いではなかったから婚約し、プレストンに束縛されるのが嫌になるとプレストンとの婚約から自由であるという確信を得るためにロジャーの求婚を受け入れる。そしてどちらの婚約も破棄し、ヘンダーソンと結婚する。シンシアは人を深く愛することができないのである。これに対して、モリーは自分が密かに慕っているロジャーがシンシアに求婚しても、ロジャーを慕い続け、ロジャーの幸せを願ってロジャーの恋を成就させようとする。

このように、モリーとシンシアとのコントラストによって、表面的な美しさよりも人間性のほうが尊く、「地道な日常的な善良さ」を発揮して、勤勉に誠実に生きることが何よりも優れているということが示されている。そして、実務的なことは何もせずに装飾品として夫のステイタスシンボルとなっていることが中産階級の理想の主婦のつとめであったことを考えると、シンシアの装飾性とモリーの有用性のコントラストは、モリーの新しさを示していると言えるであろう。

4

ここでモリーの善良さを時代との関係で考えてみたい。この物語は1864年8月から1年半にわたって『コーンヒル・マガジン』に連載されたが、鉄道の時

代と第1次選挙法改正の前のこととして語られている。語り手は「世界の工場」として繁栄を極めている時代から、鉄道の開通によって怒涛の経済発展が始まる前夜の1820年代の町を眺めているわけである。1859年にはチャールズ・ダーウィンの『種の起源』が出版され、イギリス人は国家の歴史を進化の過程と重ねて考えるようになった。なかでも、産業革命がもたらした社会の変化は誰の目にも明らかだった。そしてこの経済発展を支えたのは、労働者階級の汗と中産階級の勤勉、道徳、義務感であった。1859年にはまた、サミュエル・スマイルズの『セルフ・ヘルプ』が出版され、成功するためには勤勉、節約、忍耐、正直などが必要であることを実例をあげて示したこの本は、空前のベストセラーとなった。こういった時代背景に照らすと、モリーの善良さは英国の繁栄を築いた中産階級のエートスを反映しているといえる。そしてハムレー家の没落をはじめとした絶えざる社会変化の中でも変わらない恒久的価値として、モリーの善良さが示されていると考えられるのである。

5

最後に、ギブソン夫人とシンシアの造形に触れておきたい。この女性たちはモリーの単なる引き立て役でも、悪役でもなく、独自の輝きを放つ存在なのである。ギブソン夫人もシンシアも、その言動が人を傷付けるが、二人に悪意はない。そして、二人の言動の背景と心理が巧みに描かれているので、この二人は生身の人間としての実在感をもっている。

ギブソン夫人は、損得勘定でしか物事を判断できないので、自分の言動が道徳的に間違っただけのものであっても、自分では間違いに気付かない。モリーやギブソン氏とのやりとりで見られる価値観の食い違いは滑稽ですらある。そしてギブソン夫人が損得勘定にとられる原因が若い頃の生活苦として克明に描かれているので、読者はギブソン夫人の低俗さよりも、ギブソン夫人をそうさせたお金のほうが真の悪役であると感じるのである。ギブソン夫人は必死で体面を繕う貧乏な女教師として、スノッブの代表として、そして娘をお金持ちと結婚させようとする母親として、ジェンティリティの現実の姿を映しており、物語のリアリズムに大きく貢献しているといえる。

シンシアは無節操に見えるが、その行動は、運命にあらがい自分らしい生き方を模索する軌跡として一貫性をもっている。シンシアは男の子を欲しがっていた母親から生まれ、父親を亡くし、4才から寄宿学校に預けられ、母親から殆ど無視されて成長する。そのため、シンシアは幼い頃の母親の仕打ちを許すことができずに母親に反抗するのである。一方、母親が一人で生計を立てるには子供を預けてガヴァネスになり、雇い主にへつらうより他になかったことを理解しており、母親の雇い主で権力者であるカムナー家にも反感を持っている。また、母親の生き方に反発しながらも、財産のないジェンティリティの娘である自分は、ギブソン氏の好意がなければガヴァネスになるしかないことを自覚している。シンシアは寄宿学校時代に孤独と貧困から逃れるために、カムナー家の土地差配人プレストンからお金を借り、結婚を約束したのであるが、この束縛から逃れるためにロジャーと婚約し、どちらの婚約も解消するとシンシアは自由になって嬉しいと感じる。そして最後にロンドンで弁護士ヘンダーソンと結婚し、カムナー家を頂点とするホリングフォードの封建的な社会を脱出する。シンシアは道徳的にはモリーに及ばないが、シンシアの複雑な内面と閉塞状況における苦悩がシンシアに魅力と実在感をあたえている。

おわりに

以上のことから、ギャスケルは『妻たちと娘たち』において、“steady, everyday goodness”こそ真の価値であるという道徳的な主題を物語の根底におき、様々な悩みを抱えた様々な階級の人たちを登場させて、金銭と階級が幅を利かせている現実的な社会の鳥瞰図を構築し、モリーの成長を中心として、天使ではない現実の人間の内面を描いていることがわかる。道徳的な主題とリアリズムが溶け合い、教訓物語を越えた、ためになって楽しい風俗小説となっているところが『妻たちと娘たち』の魅力のひとつであるといえよう。

注

- 1) A. W. Ward, 'Introduction' to *Wives and Daughters* (New York: AMS Press, 1972) p. xxx

デイヴィッド・セシル著 鮎沢乗光、都留信夫、富士川和夫共訳 『イギリス小説鑑賞
—ヴィクトリア朝初期の作家たち—』（開文社出版、1983） p.285

- 2) Elizabeth Gaskell, *Wives and Daughters* (London: Dent, 1968) p.44 以下、本作品からの引用は括弧内にページ数のみを記す。
- 3) Winifred Gérin, *Elizabeth Gaskell: A Biography* (Oxford: Oxford U.P., 1976) p.288
- 4) *ibid.*, pp.285-6